



ビワコダス研究短報 No.2

電子ネットワーク発達史とビワコダス

戸田孝 (琵琶湖博物館)

ビワコダスの活動は電子ネットワークに支えられてきた。そして、世の中のネットワーク環境の急激な発展に同期してビワコダスも進展してきたという側面も見受けられる。

しかしながら、ビワコダスは決して世の中のブームに追われてきたわけではない。むしろ、ビワコダスで求めていたものが、偶然にも世の中の進展に合致したとも考え得る状況があった。本論では、この観点からビワコダスの発展過程を振り返り、今後の方向性を考えるための基礎情報をまとめる。

パソコン通信の議論から生まれたビワコダス

ビワコダスには「ホタルダス・ユキダス」という前史がある(文献1)。これは、滋賀県琵琶湖研究所のプロジェクト研究の一環として1989年度から1991年度までの3年間にわたって進められた「身近な環境(具体的には虫と雪)を地域住民自身の手で観察する」プロジェクトである。

このプロジェクトで課題の1つとなったのが、参加住民間のコミュニケーションである。プロジェクトには職業も居住地域も異なる様々な立場の住民が参加することを想定するから、日常的に参集して議論を進めることは不可能である。しかし、郵便や電話などの通信手段では、自由で迅速なコミュニケーションは図れない。この問題を克服するために、当時新しいメディアとして注目を集めていた「パソコン通信」を利用することが考えられた。パソコン通信は、各参加者が「ホスト局」に電話回線を通して接続して、メッセージを登録し、他の参加者が登録したメッセージを読むという作業によって成立する。

日常的に参集できないという問題は「地理的隔絶」と「時間的隔絶」の問題である。このうち、「地理的隔絶」の問題は電話回線の利用によって克服され、「時間的隔絶」の問題は「ホスト局」に登録されたメッセージを時間を置いて読むことによって克服される。そして、そのメッセージは多数の参加者が読むことができるから、会議室に多数参集した場合と同じ効果が得られる。つまり、電話のような1対1のコミュニケーションとは違い、様々な観点からの多様な意見が飛び交うことによって、議論が発展して行くことが期待される。

当時は、日本語がまともに使えるパソコンが機能的にも価格的にも安定し、大手の通信サービスに対抗する形で各地の「草の根パソコン通信ホスト局」が次々に設立されていた時期である。ホタルダスとユキダスでも、滋賀県内で設立後2年以内の4つの局が協力して電子ネットワークの部分を担当することになった。

パソコン通信は「ホスト局」が情報を集中管理するため、各ホスト局を中心に閉じたコミュニティが形成される傾向がある。そこで、各ホストの特定部分を定期的に検索して新規メッセージを交換するという「ネットリンク」システム(文献2)を動作させた。原理的にはインターネットにおけるNetNewsと同じであるが、本質的に「閉じた情報管理」を各々の流儀で行っている中での実現には技術的な困難もあり、あくまでホタルダス・ユキダス専用システムに留まった。

しかし、ネットリンクによって広がったコミュニティでは活発な議論が展開された。これには、各地の観測データをオンラインで迅速に閲覧できるという当時としては画期的なシステムが目前に

◆目次

電子ネットワーク発達史とビワコダス	戸田孝 (琵琶湖博物館)	1
琵琶湖の風伝承に見る漁師の行動力	青柳智之 (日本民俗学会会員)	4
ビワコダスから見た近江盆地の局地風	松井一幸 (滋賀県立高島高等学校)・武田栄夫 (日本気象協会)	別冊

あったことも効果的に作用したと思われる。そして、このような議論を通じて、プロジェクト自体が思わぬ方向へ発展していくこともあった。ピワコダスもその発展の1つとして始まったものである。

電子ネットワークの活用によって可能となった風観測

ピワコダスの端緒となったユキダスの議論は「ヒアラシ」に関するものであった(文献3)。これは、琵琶湖地域で天気予報技術として伝承されてきた「風の吹き方」に対する命名の1つで、大雪の到来を予告する「雪起こしの風」である。この議論の中で、実際に風速計を立ててきちんと観測してみたいという声が上がった。そして1992年度に、その4年後に開館予定だった滋賀県立琵琶湖博物館で観測成果を展示公開できるシステムを実現するプロジェクトとして「ピワコダス」が始まった。

ところで、風の観測には「風速計という厄介なものを設置すること」以外にも深刻な技術的問題がある。それは「常時観測が必要」「1ヶ所の観測では不十分」の2点である。1日1回の観測でも十分な意味がある積雪観測と違って、風の観測には24時間態勢と大量情報の処理が必要であり、人手を介したデータ交換は現実的でない。

そこで、電気信号を出力する風速計をパソコンに接続して観測を行い、データ交換もパソコン通信の技術を利用することにした。即ち、観測局がパソコン通信ホストとしても動作し、そのサービスの1つとして観測データを提供することにしたのである。これには、データの提供元で議論を行うことにより盛り上げていこうという意図もあった。

この時期には、個人レベルで購入できるパソコンはシングルタスク(複数の作業を同時進行させる仕組みが用意されていない)であり、観測局とホスト局の共存を実現するのに苦労があった。しかし、パソコン通信を介した議論によって形成された「応援団」のバックアップも得ながら克服し、1993年末には一応の完成をみた。

成果発信に関する欲求を実現したインターネット環境

観測とデータ提供が安定的に運用できるようになった1994年夏ごろから、データを効果的に画面表示して解釈できるようにする方法の検討が始まった。1994年末には原型が完成し、これを元にデ

ータ選択などの補助機能を使いやすく作り込んでいく形で、博物館展示室内のシステムが製作された。

しかし、展示室内のみでの情報発信では対象者が限られてしまう。そこで、ピワコダスのデータ交換環境を利用して、より広い情報発信を実現したいという欲求がメンバーの間から出てきた。しかも、これは琵琶湖博物館の意思とも一致した。展示活動の限界を認識したうえで「展示は入口に過ぎない」と主張する琵琶湖博物館としては、新しい手段で活動の輪を広げようとするピワコダスに期待を寄せたのである。

ところが、従来型パソコン通信には技術的な限界があった。その1つは、通信速度上の制約もあって、画像情報の標準化が完成していなかったことである。標準化が不完全ということは、必要な利用環境が一般の利用者には期待できず、情報提供者側が要求する環境を前もって導入する必要があるということである。この条件は新規参加者にとって「敷居の高さ」と感じられ、活動の輪を広げる上で重大な障害となる。風データの効率的な解釈には視覚的な表現が欠かせないため、これはピワコダスにとって深刻な問題であった。

さらに、従来型パソコン通信のシングルタスク性も問題であった。即ち、誰かがホスト局に接続してデータを得ている間、他の利用者は接続できないのである。これでは不特定多数を相手にした柔軟な情報提供は難しい。また逆に、1人の利用者が複数のホスト局のデータを同時に利用することも難しくなる。

これらの2つの問題は、インターネット環境では解決済のものである。回線専有の問題はインターネットのTCP/IP通信では起こらないし、画像情報の標準化も静止画像については完成しており、動画も完成に近い。ピワコダスでは、Java言語による動画表示プログラムを提供する方法を採った。Java言語には、従来型パソコン通信で用いていたBasic言語とは違って、標準的なインターネット閲覧ソフトウェアで直ちに実行できるという特性があるため、「敷居の高さ」という問題は解消される。

このように、ピワコダスでは「インターネットに対応して新しいことを考えた」のではなく、「以前からの欲求がインターネットで実現できるようになった」ので実現させたのである。その前提には、従来の技術がどこまで応用できるか試行錯誤して限界を見極め、何が実現されれば欲求が満たされるかを明瞭に認識したことがあった。

ピワコダスがインターネットを利用した情報発

信の実験を始めたのは、10点観測網が完成して1年経過し、運用が安定したと認められるようになった1997年秋ごろで、Java動画の運用を開始したのは翌1998年1月である。インターネットブームは1990年代前半にその兆しがあり、1995年前後にピークを迎えた。即ち、1997年というタイミングはインターネットが「一過性のブーム」を脱して、「本当に有効な利用法」を探りつつ定着に向っていた時期である。このような時期にビワコダスが「インターネットで解決可能な課題」を丁度抱えていたことが、成功への足掛りになったと言えるであろう。

本当に効果的なインターネット発信は、そのためのコンテンツ（発信すべき情報内容）を新たに作り出すことでは決してなく、「手持ちの既存のネタ」からインターネットに適合するものを探し出すことではないだろうか。ビワコダスの経験はこの方向性を示唆している。

「議論」しにくいというインターネットの限界

インターネットブームの主役になったWWW（World Wide Web）は、本質的に双方向性に難点のある技術である。ビワコダスにおいても、この難点が課題の1つになっている。WWWによって広く開放的な情報発信が実現したものの、それは一方的である。

双方向性の欠如は、ブームによってWWWが「大衆化」を始めた当初から大きな問題として認識されていたようで、早い時期にWWW上に載る形の掲示板システムが実用化された。しかし、WWWは元々「可能な限りの多数を対象とした一方的情報発信」を目指して設計されたという技術的理由により、その上で運用される掲示板システムは「極端に開放的で匿名性が高い」ものにならざるを得ない。

ユキダスからビワコダスへの原動力は電子メディアを介した開放的な「議論」にあった。従来型パソコン通信の場合には、議論の相手は「たまには顔を合わせることもある」程度には気心の知れた間柄であり、ある程度は安心して議論に臨むことができた。しかし、WWWの議論の場には、全く未知の人物が入り込むことが容易であるため、気軽な議論が進めにくい。即ち、議論の場をWWWに開放するには相応の覚悟と態勢が必要である。

そのため、ビワコダスの最近の議論は、予め登録したメンバーの相互間でメールを一斉配送する「メーリングリスト」で行われ、かつてより逆に閉

鎖的になってしまっている。これでは、ビワコダスの原点である「広範な立場の人々による共同作業」を実現するために「参加者の輪を徐々に広げていく」過程が困難になってしまう。これは、電子ネットワークを利用して住民参加型の活動を進めようとする場合に共通する、深刻な問題の1つともいえるであろう。

ビワコダスでは、その対策として「メールマガジン」を利用した「ゆっくりだが広く深い」議論との併用を試みている。メールマガジンとは、登録者に定期的にメールを送りつけるシステムであり、発信者が固定されていて雑誌に似ていることから、そのように呼ばれている。編集者が介在するため、パソコン通信のような敏速な議論は進められないが、対象者を広げる可能性はパソコン通信と同様である。ビワコダスのメールマガジンは本年1月に創刊したばかりで、その効果のほどは未知数であるが、今後の発展に期待したい。

【参考文献】

- (1) Toda, T. and K. Matsui, 1999, 「Biwako-Das: Public collaboration in meteorological observation with a computer communication network」, 『Integrated Environmental Management』, Y. Itakura et al. (ed.), 255-260. Lewis, Boca Raton.
- (2) 嘉田由紀子・大西行雄, 1992, 「野外調査と電線ネットワーク—パソコン通信による地域情報の発信と咀嚼」, 『情報と日本人』, 野村雅一編, 83頁～105頁, ドメス出版.
- (3) 琵琶湖地域環境教育研究会編, 1999, 『琵琶湖博物館研究調査報告』第14号, 316頁.
- (4) 戸田孝, 2001, 「湖国の風を探る—琵琶湖の気象調査の試み—」, 『FRONT』第13巻第6号, 30頁～32頁.

琵琶湖の風伝承に見る漁師の行動力

青柳 智之（日本民俗学会会員）

風の害と漁の関わり—伝承資料を通して

湖では風による水難事故が後を絶たない。「琵琶湖でボートが風に煽られ遭難」—このような新聞記事を時折見かける。小西益夫さん（天津市本堅田 昭和10年生まれ）も長年琵琶湖で漁を行ってきた一人だが、1988（昭和63）年頃、近江舞子へフナのサシアミ漁に出た時、キタカゼのハヤテに煽られて、溺れかけているサーファーを救助した、と語ってくれた。

琵琶湖は風の多い湖だが、湖岸に暮らす人々は長年、漁業によって生活を支えてきた。漁師達の風に対する経験談に耳を傾る時、一般人の風に対する認識との間に格差を痛感する。漁師は出漁する際に空模様を見て、その日の風の吹き方を予測して出漁の可否を決めており、風には敏感だったからである。遮断物がない湖上で受ける強風は漁師の命を奪う危険があったのだ。

これまで伝承資料を用いて、湖における風と漁の関係について体系的な考察は行われてこなかった。とりわけ漁師の風に対する認識について考える時、上述の理由により両者の関わりを見逃すことはできない。

本稿では各事例を通して風に対して漁師が強い認識を持っていること確認し、結論として、①風の被害を受けぬよう、風の吹き方を予測したり風に適した漁場や漁期を設定する行動力が漁師に備わっていたこと、②漁師の伝える風伝承が水難事故を多発する現代人への警鐘であることを述べる。本稿で用いる伝承資料とは祖先の代から暮らしの中で培われてきた地域住民の知恵や認識である。なお、事例として挙げた伝承資料は1998（平成10）年8月から2001（平成13）年2月にわたり、発表者が琵琶湖湖岸の漁村集落を訪ね、現役・引退を問わず漁業者から聞き取り調査した事柄である。

1 風が害となる時

冒頭でも触れたように、強風や高波によって、漁船やレジャーボートの遭難する事故が後を絶たないが、風が人間にとって害となっている。

事例1 高木広義さん（高島郡新旭町深溝 昭和14年生まれ）は数年前に深溝の沖合でニシキタ寄りのハヤテにあい船は沈んでしまったが、幸いエリに捕まっていたところ、舟木の漁師の救助されて一命をとりとめた。

事例2 藤野ひとみさん（近江八幡市長命寺 昭和36年生まれ）は数年前の9月、朝9時～10時頃、彦根から長命寺へ戻る時、沖島付近でカミからの強風（南西の風）で沈みかけた船の艫にいた人を助けたことがある。

しかし、一方、漁師の中には遭難を経験したことのない漁師もいる。

平田久夫さん（彦根市柳川町 大正8年生まれ）は、祖父の代には水難事故で命を落とした漁師が3人いたと聞いているが、自分達が現役の漁師として働いていた時分には舟で死ぬということがなかったと語る。「祖父の代に3人」とは当時の船の設備などを考慮しても、現代の水難件数と比較したら、決して多い数ではないだろう。これは後に挙げるケシキミなどが綿密に行われていたためである。

2 ケシキミ・カゼマチ（ニワマチ）の伝承—風を予測する

本項では漁師の行ったケシキミとカゼマチの事例を挙げ、風に対して漁師達が害から身を守るため、強い危機意識をもっていたことを確認する。「ケシキミ」とは雲の動き方などを観察して、風の吹き方を予想することであり、「ニワマチ」とは風や波浪の止むまで出漁を見合わせたり、湖上での仕事を中断することである。

（1）ケシキミの伝承^①

表aは「ケシキミ」の事例をまとめたものである。漁師は出漁する日の早朝もしくは前日の夕方にかけてきた雲の動きを観察するケースの多いことが分かる。また、表bは「ハヤテ」のケシキミについてまとめたものである。「ハヤテ」のケシキミは漁師にとって欠かすことができなかった。「ハヤテ」とは3月～5月にかけて吹く突風のことで、この風が吹く前の天候は非常によい。しかし、ハヤテの発生する前には必ずそれを予兆するケシキが上空にできていることを漁師達は見逃すことはなかった。湖の天候に不慣れな者がこのハヤテによって遭難することが多いと言われているが、漁師のようにケシキミを行わず、単に晴天だから風が吹かないという理由で湖に出してしまうためと漁師達は口をそろえる。

舟の大型化・エンジンの改良が進んでいる今日

表a ケシキミの伝承

番号	伝承内容	伝承者(居住地 氏名 生年)
1	夜、2時頃に雲の流れを見て風向きを捉える。	神崎郡能登川町栗見出在家 松村喜久男さん(昭和14年)
2	明け方の3時～4時、北西の空を見る。	高島郡マキノ町西浜 川瀬重隆さん(昭和5年)
3	イサザ引きの時は午前4時に起床し、5時・6時に出漁するが、その際にはカタニシ・ナカニシを見る。	高島郡マキノ町知内 中川金一郎さん(大正3年)
4	ケシキミは朝行うが、夜中の風の吹き方で翌日のケシキが分かる。夜中の12時までに風が吹くと、宵オチといい、翌日のケシキは穏やかである。一方、12時過ぎに吹く明オチは午後から荒れる。宵オチも明オチも10～20分ほど吹いている。この伝承は1月～4月に見られる。	高島郡今津町浜分 大蓋俊弥さん(昭和8年)
5	「アサゲシキ、ウソつかん」と言い、出漁する方向の朝のケシキを見た。	伊香郡西浅井町菅浦 東来正義さん(昭和7年)
6	ケシキミは向かう先の漁場の空を見るが、夕暮れ時分に行う。(前日のうちに翌日のケシキができています。)	高島郡安曇川町南舟木 八木勝さん(昭和6年)
7	夕方、西の空がすき、雲が走ると翌日は風が吹く。	高島郡安曇川町北舟木 大置省三さん(昭和6年)
8	夕方にクモヤケすると、翌日は強風になる。	伊香郡西浅井町菅浦 東来正義さん(昭和7年)
9	入り日の時、山のクグチに雲がたなびくと、翌日は風の吹く前兆である。	伊香郡西浅井町山梨子 横井孫三郎さん(大正4年)
10	月の入りから風が吹き、ケシキが変わる。月に曇がかかっていたり、月が赤いと翌日は天候が荒れる。	高島郡今津町南浜 田村喜代治さん(昭和8年)
11	月の出方でも風の吹き方が分かる。ヒガシカゼの吹き方として、月の出に吹き出すと月の入りまで吹き、逆に月の入りから吹き出すと、月の出まで吹く。	高島郡今津町浜分 大蓋俊弥さん(昭和8年)
12	月の出入りの時にはケシキミをする。満月の時は荒く、曇りの時は弱い。	高島郡マキノ町西浜 和田弥栄男さん(大正15年)
13	南の山の上に来た雲が北に向かって流れると、ミナミ(南東風)が吹いてくる。	東浅井郡びわ町南浜 川瀬重隆さん(昭和5年)
14	ミナミカゼの時には東側の山を見、キタカゼの時は西側の山を見る。その際に山の上空に雲ができていたらアラシになる。	高島郡マキノ町西浜 和田弥栄男さん(大正15年)
15	北に雲があり、南西の風が吹いてくると、後からキタカゼが吹く。また、南にある雲が東に流れるとキタカゼになる。	東浅井郡びわ町南浜 川瀬重隆さん(昭和5年)
16	例えば、今日のキタカゼが1日、吹くかどうかを判断するのに雲の走り方を見た。風が穏やかな時は雲の走り方が一定であるが、雲の走り方が速い時はにわか吹き出す。	伊香郡西浅井町月出 松田佐一さん(大正3年)

表b ハヤテのケシキミの伝承

番号	伝承内容	伝承者(居住地 氏名 生年)
1	サンガツバヤテはにわかユウダチゲのように吹き、雨が押してくる。また雲が強く走り、ツマキ風になる。	伊香郡西浅井町大浦 柳谷清太郎さん(明治42年)
2	サンガツバヤテが吹く前には小さい波が立ち、天気の良い日には小さい雲が出る。ハヤテはニシキタの風である。	伊香郡西浅井町菅浦 東来正義さん(昭和7年)
3	安曇川岳があるので西に雲ができて、ハヤテになる。	高島郡今津町浜分 大蓋俊弥さん(昭和8年)
4	ハヤテの時は西の山に雲がかかり、山頂で雲が舞うと北西風が下りてくる。また、夏にはユウダチアラシが起こる。この時もハヤテがつく方向から風が吹く。	大津市本堅田 小西益夫さん(昭和10年)
5	ハヤテは御水取り時分から4月にかけて吹く北西風である。この時、雷鳴はせず稲光のみが起こる。「トイテが下りる」と言い、サンガツバヤテはトイテ(北西)の風である。この時には半紙を撒き散らしたような波が立ってくる。5月頃にはカミバヤテ(南東寄りの突風)が吹く。	高島郡今津町南浜 田村喜代治さん(昭和8年)
6	霧が晴れてきたときにハヤテが吹く	大津市本堅田 竹端さん(昭和13年)
7	サンガツバヤテはニシカゼの突風である。ハヤテになると、舞い風になり、波から飛ばされた飛沫がオビになる。黒いオビが濃くなればなるほど、風は強くなる。	滋賀郡志賀町南小松 磯田深さん(昭和20年)
8	サンガツバヤテはニシカゼの突風であり、3月中旬～4月中旬にかけての晴天時に西から東に雲が流れて消えると発生する。	滋賀郡志賀町北小松 池田俊雄さん(大正15年)
9	サンガツバヤテはミナミからノタがきて若狭口の空が空いて、ニシカゼになる。このニシカゼをオチカゼという。	高島郡安曇川町大字四津川字今在家 田中公一さん(昭和7年)
10	ケシキの吹き方でハヤテの来る時間が分かる。ジワッと消えるケシキは吹いてくる風も柔らかく、吹くまでに時間がかかる。一方、ケシキがすぐ消えるものはすぐ下りてくるし強い。ハヤテといえば、桜の咲く頃に吹く風をサンガツバヤテという。夏にはユウダチアラシが起こるが、「夕立3日」といい、1日ずつ、時間が早くずれて天気が崩れる。以前、丸子舟が近江舞子付近でハヤテに遭い、運搬中の薪炭を覆っていた板が全部飛ばされてしまった。	高島郡安曇川町南舟木 八木勝さん(昭和6年)
11	キタバヤテは山の上にケシキで来た途端に下りてくる。ハヤテはケシキミをしても分からない。出漁中にハヤテに出くわしたら、網はそのままにしてでも、港に戻る。知内では南東の風が強いと、この風の風下に当たるのでクモがちぎれる。ハヤテが吹くと、風と波が伸びるものだ。	高島郡マキノ町知内 中川金一郎さん(大正3年)
12	ハヤテは2月下旬～3月にかけて北の空にケシキがでると、消えて吹く。このケシキになったら、昼過ぎには帰港する。山に雲があるときに吹く突風をハヤテと呼ぶ。雲がなくなると、同じキタカゼでも呼び方がユウダチアラシに変わる。時期は4～5月頃。	高島郡マキノ町西浜 和田弥栄男さん(大正15年)
13	ハヤテは雲のない日に発生する。西の空に雲がポツとできると、散らばって消える。午後1時～3時頃の間発生する。(ウミではその前にすでに南からウネリがおきる。)	高島郡マキノ町西浜 辻久一さん(昭和9年)
14	竹生島の上空に赤い雲ができて、ハヤテが吹く。	東浅井郡びわ町南浜 川瀬重隆さん(昭和4年)
15	4～5月、北西の空に雲がでると、ハヤテが吹く。	東浅井郡びわ町南浜 川瀬重隆さん(昭和4年)
16	ハヤテカゼは北から吹いてくる。大浦の空が暗くなる。	東浅井郡湖北町延勝寺 河越幸右衛門さん(昭和4年)
17	サンガツバヤテといい、西の山の上にケシキができてすぐに消えると、ハヤテが吹く。ハヤテが吹いてきたら、引いている網をほかしてでも、港に戻らなくてはならない。ハヤテは北西の風である。	東浅井郡湖北町東尾上 七里一郎さん(昭和6年)

でも、ケシキミやカゼマチは漁師の間で継承されており、その伝承の重みは十分に理解できる。中には故松岡多右衛門（東浅井郡湖北町尾上 明治30年生まれ）のように、「漁師を引退した後も毎朝、ケシキを眺めていた」と語ることもある。

(2) ニワマチ・カゼマチの伝承

ニワマチ・カゼマチは、魚の鮮度を落とさないために一刻も早く網を上げなくてはならない時や湖上で急に天候が崩れた際に、行った伝承である。

事例3 フナ・アユ漁の時には網を埋める前には出漁しないが、網を既に埋めていれば、ニワマチをして出漁する。（松井清治さん 滋賀郡志賀町北小松 昭和2年生まれ）

事例4 疋田新作さん（彦根市須越町 大正9年生まれ）は復員後の昭和20年代、石油エンジンの木造船を所有していた。須越から多景島まで約40分かかった。多景島近辺で漁を行っている時に風が強くなってくるとカゼマチをしたという。多景島は周囲が5メートル以上の岩壁になっており、その陰は絶好の風除けになったのである。今日のように舟が近代化・大型化すると、天候が悪くなっても、素早く帰港できるので、このようにカゼマチをする光景も見られなくなったという。

事例5 松田佐一さん（伊香郡西浅井町月出 大正3年生まれ）オキスクイで漁をしているときにケシキが悪くなってきたら、風の当たらない場所へ逃げるのが肝要だった。岩屋・杉端・延勝寺・早崎付近で漁をしている時は尾上の漁港に、長浜にいる時は南浜の漁港に逃げたものだという。

3 漁法と風

琵琶湖では様々な漁法によって漁がされてきた。コイト漁・エリ漁・オイサデ漁はその代表である。本項ではエリ漁を中心に風と対峙してきた漁師の姿が事例から窺えるが、漁師は風の害を避けるため、風の吹き出す時期などを予め見極め、漁期や漁場などを決めて行動していたことが理解できる。

事例6 大釜俊弥さん（滋賀県高島郡今津町浜分昭和8年生まれ）はエリ漁専門の漁師である。大釜さんは小松から尾上にかけてのエリ立てを行い、エリの管理の方法を各漁村の漁師に教えた。大釜さんがエリ立てを始めた

頃、エリは篋製だった。エリを立てるために、大釜さんは田舟を使用した。田舟は無動力船で、4~5艘所有していた。エリ立ての時期は10月~12月の間に行った。岸寄りの浅瀬なら少々の風でも立てることが出来たという。

水深のある地点では風の抵抗を受けるので作業がしにくいばかりでなく、網が湖流に流されてしまう危険があった。篋エリは1ヶ所に立てるのに約1週間を要した。

風による波でエリが倒れ、雨の中、船を走らせたこともあった。

エリは金比羅サンの祭が始まる7月10日を過ぎると、外してしまった。この時期はナガセという南東寄りの風があたり、エリが流されてしまうためだ。この風が吹く時期を考慮して、2月~6月末がコアユの漁期であった。

事例7 滋賀県守山市は琵琶湖でエリ漁が最も最初に行われた場所と漁師の間では言われている。国友保さん（守山市今浜町在住 昭和9年生まれ）は昭和43年から守山でエリ漁を始めた。それまでも、長浜や彦根へ漁業協同組合の仲間と共にエリ立てに行った。国友さんが始めて間もなく昭和45年にエリは竹製からビニール製に変わった。竹製のエリの場合、4月から漁を始めるために1ヶ月前から準備をしたという。また、網と異なり、竹やビニールといった素材はヒラオロシの時に転けやすかった。風の当たり具合で漁期にも違いが生じた。例えば、現在の琵琶湖大橋の北湖側、旧野洲川尻では2月になると、エリを立てられるが、大橋の南湖側ではヒアラシの八日吹きが当たるので3月になってエリを入れたという。

8~9月になると台風によって、エリが飛ばされることもあった。現在の網エリもパイプを残し、網だけは抜いてしまう。

事例8 松田佐一さん（伊香郡西浅井町月出在住 大正3年生まれ）は1985年に71才になるまで約20年間、特に湖北地域で漁に携わってきた。漁を始めた時、コアユ漁を7~8年ほど行ったが、2月~6月にはエリ漁、3~5月はオイサデ漁で行った。岸辺に寄るアユを捕らえるオイサデ漁は水面を直視するためミナミカゼの時にはできなかったという。ミナミカゼが吹くと塩津付近は風下に当た

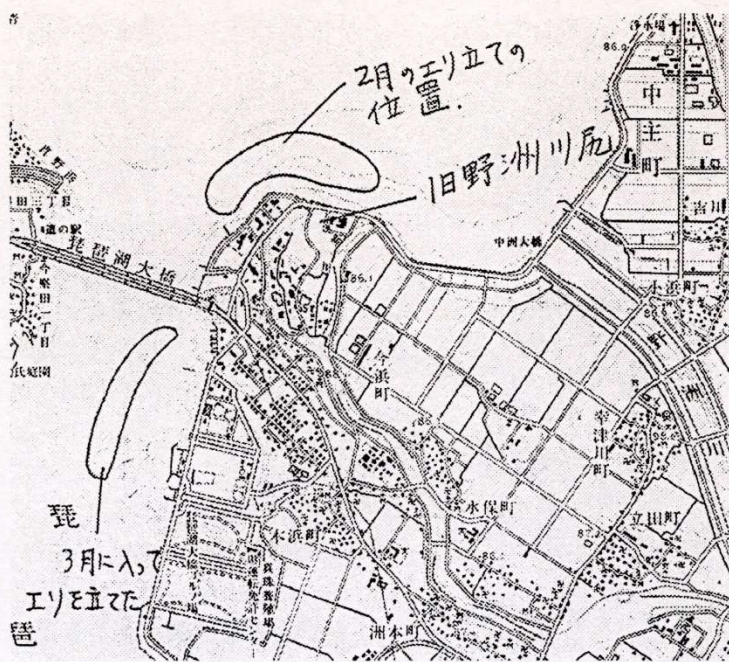


図1 国友さんの伝承するエリ立ての位置 (事例7)
 国土地理院発行「京都東北部」1:50,000

り、水際が汚濁したためだ。

事例9 12月20日～7月、ニシビアラシの時はコアユの漁獲がよかった。和邇・小松・今津・知内・海津では昭和30年～50年の間に地曳き網を操業していた。漁場は今津の港から水深20メートル付近だった。地引き網の場合、風下に当たる地域では漁はできないと言われた。従って、湖西の場合、東寄りの風では漁はできなかった。(高島郡今津町西浜 橋本一雄さん 昭和3年生まれ)

ところで、やや本題から外れるが、橋本さんは風に対する漁師の素朴な思いを語ってくれた。

ニシビアラシの時には漁はできたが、冷たい風だった。1～2月の出漁時は田簀を着た。雪が降っている時、いやいやながら仕事をしたものだという。だからシオミ役から出漁の合図が知らされると、落胆したこともあった。

和田弥栄男さん(高島郡マキノ町西浜 大正15年生まれ)も同様の話を聞かせてくれた。

マキノ町西浜はほとんどキタカゼが吹くが、地引き網漁をしていた頃、「ミナミが吹かんかなあ」とよく思ったという。ミナミカゼが吹けば、ウミが荒れるので、漁はなくなり、青年団の連中が寄

り集まることができたからだ。

お二人とも漁師一筋で活躍され、湖の漁に関して周囲の人々から絶大な信頼を受けているのだが、未だ若年期の本心を垣間見た思いがする。それだけ、風が出漁を大きく左右していたこと、風が吹かないときはほぼ出漁していたこと、若者漁師にとっての風認識など、この二つの資料はかつての琵琶湖の漁業を理解する上で貴重なメッセージが込められている。

4 漁と風と地形—カゲを求めて漁をする

琵琶湖は崎や浜、山裾などに縁取られた地形の変化に富んだ湖である。

こうした地形を利用して、漁師達は風の当たらない場所を求めて漁を行った。本項では事例を踏まえながら、「風が出ている＝出漁しない」と言うのではなく、風の当たらない漁場を求めてきた漁師の計画的な行動について理解する。

事例10 大津口から吹いてくる風をヒアラシと呼ぶが、その方角は南西～南にかけてである。湖南でヒアラシの吹いている時は舟木崎の上—新旭町方面—では吹かないので、その周辺で漁をする。南舟木に戻るにはヒアラシが止むまで待っていた。(高島郡安曇川町南舟木 八木勝さん 昭和6年生まれ)

事例11 雄松崎付近の水深5メートルはヒアラシが
あたって出漁できないので、勝野口へ廻る。
一方、ユブキは当たらないので漁は可能。
また、大溝漁港の沖水深5メートルではキ
タカゼは当たらないが、ユブキあたるので
出漁できず。(松井清治さん 滋賀郡志賀
町北小松 昭和2年生まれ)

事例12 大根洗いの時分、ヒアラシはきつくなる。
イサザは8月～翌年3月までだったが、竹生
島で漁ができない時は大崎へ行った、ユブ
キは南東の方角から吹くミナミカゼだ。波
のみで風はない。竹生島がカゲウラになる
ので漁は可能だった。イサザ・エビ・モロ
コは暮れ場～2月、竹生島に生える椎を碇
代わりに船を停めて漁をした。
木造船は5馬力で半時間かかるが、櫓舟だ
と2時間かかる。昭和25、6年には竹生島で
25艘もの船がチュウビキをしていた。(和
田弥栄男さん 高島郡マキノ町西浜 大正
15年生まれ)

事例13 四津川付近はキタカゼやミナミカゼが当た
らない。「四津川はニワマワリがよい」と
漁師の間では言ったものだ。(齋藤龍次郎
さん 高島郡安曇川町大字四津川 昭和12
年生まれ)

事例14 南浜では姉川を南北にして北側はミナミカ
ゼが吹いても出漁できたが、南側はミナミ
カゼの時にはできなかった。キタカゼの時
には出漁できた。(東浅井郡びわ町南浜
川瀬義隆さん 昭和5年生まれ)

結語

漁師は風の被害を避けるため、計画を立てて仕
事を行った。その行動力は伝承によって今日まで
培われてきた。同時にそれは水難事故を起こす一
般人に大きく欠如している能力である。我々は自
然環境に対しあまりにも無知であり、近代化され
た機能や設備に依存する傾向が強い。

琵琶湖の漁業も衰退の一途を辿ると言われてお
り、漁師の語りも遺物のように扱われるかも知れ
ない。しかし、自然を畏れない現代人への警鐘で
あることを風伝承から聞き取るべきである。

【参考文献】

(1) 青柳智之, 1999, 「琵琶湖の風の民俗 2 琵琶
湖の季節風」琵琶湖地域環境教育研究会編, 『琵琶
湖博物館研究調査報告』第14号, 244頁～245頁

◆次号予告 本冊子は季刊発行の予定です。次号は秋(9月頃)発行予定です。

ビワコダスから見た近江盆地の局地風・湖陸風(仮題)
ビワコダスデータ解析・湖流モデル(仮題)
試論・近現代における漁師の風認識の変遷考(仮題)

武田栄夫・松井一幸
大西行雄
青柳智之

◆皆様の地域にはどんな風があり、またどのように名づけられていますか? 風の名前(地域固有の表現)を教えてください。

◆編集・発行・および連絡先

琵琶湖地域環境教育研究会(ビワコダス)冊子編集委員会
〒520-0862 大津市平津2-5-1 滋賀大学教育学部 板倉研究室内 琵琶湖地域環境教育研究会事務局
URL <http://koayu.eri.co.jp/biwadas> mail biwamaga@eri.co.jp
なお、本冊子はメールマガジンでも配布しております。
お申し込みは biwamaga@eri.co.jp までメールください。



無断転載を禁じます